

増加量の記載方法について

② 環境保全に関する目標との整合性に係る評価

a 長期平均濃度予測

焼却施設の稼働に伴う日平均予測濃度(二酸化いおう、二酸化窒素、浮遊粒子状物質)及び年平均予測濃度(ダイオキシン類)は、表4-1-88に示すとおりである。

バックグラウンド濃度からの増加量(年平均寄与濃度)はケース1の方が大きく、二酸化いおうで0.000116ppm、二酸化窒素で0.0007ppm、浮遊粒子状物質で0.000039mg/m³、ダイオキシン類で0.000387pg-TEQ/m³である。また、寄与率は0.2%~11.6%である。なお、二酸化いおうのバックグラウンド濃度は二酸化窒素より10分の1程度小さいことから寄与率は高めとなっている。全ての項目で環境保全に関する目標値を下回ったことから、環境保全に関する目標との整合性は図られているものと評価する。

ただし、施設の詳細な設備・機器については現時点では未確定であり、存在・供用時に稼働する設備・機器の諸元等が予測条件と異なる場合が考えられる。そのため、焼却施設の稼働に際しては、事後調査を行う。焼却施設の稼働に伴う排出ガスが周辺環境に影響を及ぼしていることが確認された場合には、適切な対策を実施することとする。

表 4-1-88 環境保全に関する目標との整合性に係る評価結果(焼却施設の稼働：長期平均濃度)

予測地点	対象物質	ケース	バックグラウンド濃度	年平均寄与濃度	寄与率	年平均予測濃度	日平均予測濃度	環境保全に関する目標
最大着地濃度地点	二酸化いおう(ppm)	ケース1	0.001	0.000116	11.6%	0.0011	0.0032	日平均値 0.04以下
		ケース2		0.000105	10.5%	0.0011	0.0032	
	二酸化窒素(ppm)	ケース1	0.011	0.0007	6.4%	0.0117	0.0276	日平均値 0.04以下
		ケース2		0.0006	5.5%	0.0116	0.0274	
	浮遊粒子状物質(mg/m ³)	ケース1	0.021	0.000039	0.2%	0.0210	0.0484	日平均値 0.10以下
		ケース2		0.000035	0.2%	0.0210	0.0484	
	ダイオキシン類(pg-TEQ/m ³)	ケース1	0.051	0.000387	0.8%	0.0514	—	年平均値 0.6以下
		ケース2		0.000351	0.7%	0.0514	—	

備考) 日平均予測濃度：年平均予測濃度から回帰式を用いて換算した値。なお、ダイオキシン類については、環境基準が年平均値であるため換算しない。

ケース1：最も排ガス量が多い場合

ケース2：ケース1と同じ処理方式で最も排ガス量が少ない場合

注 二酸化窒素の年平均寄与濃度は、窒素酸化物からの換算値を示す。

b 短期濃度予測

焼却施設の稼働に伴う1時間値の予測濃度は表4-1-89に示すとおりであり、全ての項目で環境保全に関する目標値を下回ったことから、環境保全に関する目標との整合性は図られているものと評価する。

ただし、施設の詳細な設備・機器については現時点では未確定であり、存在・供用時に稼働する設備・機器の諸元等が予測条件と異なる場合が考えられる。そのため、焼却施設の稼働に際しては、事後調査を行う。焼却施設の稼働に伴う排出ガスが周辺環境に影響を及ぼしていることが確認された場合には、適切な対策を実施することとする。